

「アーカイブスから語り継ぐ～若者たちの阪神・淡路大震災ノート」(詳録)

講師 住田 功一 (NHK大阪放送局 アナウンサー)

日時 2010年10月23日(土)

会場 関西大学社会安全学部ミュージズホール



皆さん、こんにちは。住田です。よろしくお願いいたします。

今日は市民の皆さんも交えてということですので、私が高中生あるいは大学生と一緒に活動したプロジェクトについてご覧いただきながら、阪神・淡路大震災と、それから災害のときに何が起るのかということをちょっと振り返ってみたいと思います。

『語り継ぎたい。命の尊さー阪神大震災ノート』

私が忘れられないのは、阪神・淡路大震災です。およそ16年前のことになります。それまでも私は



中継リポーターなどもして、何かあってデスクから指示があったら、それ行

けというので中継車と一緒にいたり、あるいは中継車とばらばらに行って現地で合流してすぐに放送を出すということをしていたのですけれども、阪神・淡路大震災は、それまでの非常にハイテンションで「やるぞ」という、いわゆるアドレナリン全開の仕事モードとは違って、大変しんどい報道になりました。

それはやはり個人的に、自分のふるさとはやられたということが非常に大きな原因でした。私はたまたま帰省して、第一報の電話リポートや初動中継というものに携わったのですが、あまりにも被害が大きく、かつ面的に被害が広がっていて伝えきれなかったのです。それと、いざというときにふるさとのために何の役にも立てなかったという徒労感にさいなまれて、震災の後は落ち込みました。

そんなときに、神奈川県小田原市の主婦グループの皆さんが、ちょうど防災のことを考えているということで呼んでくださったのです。神奈川県の西部に直下型の地震があったときにどうするかということを考えている主婦グループの皆さんたちと、お茶を飲みながらお話をしたのです。そして、その中にいた出版の編集者の方が、そのときに私が話した大震災の体験をブックレットにまとめようと言ってくださって、『語り継ぎたい。命の尊さー阪神大震災ノート』という本を出しまし

た。高校の社会科の副読本や修学旅行の参考資料や総合学習のテキストなどにもしていただいて、中学や高校、あるいは大学などの若い人たちと話す機会に恵まれました。1999年に初版が出てから10年ぐらい、毎年4~5校のペースで若い人たちと話をしてきました。

最初はまだ震災の記憶が非常に生々しいときでしたので、中にはおばあちゃんを亡くしたとか、あるいは親せきが神戸で被害を受けたという人たちがいて、話が終わったあと私のそばに寄ってきて、実はこういうことがあったのだと涙を浮かべながら語ってくださる生徒さん・学生さんもいました。

それが10年ぐらいたってくると、どんどん世代が若くなります。今の高校1年生がちょうど震災の年に生まれたぐらいです。ですから、大学生でも記憶にはほとんどないという世代です。彼らはやはり話をしても最初のころと違って、僕らにとっては関東大震災という言葉が教科書の中にしかなかったのと同じような感じで、どうも震災というものを昔のことととらえているのではないだろうか、だんだん遠い存在になっているのではないかなという気がしてきました。日本史の教科書でも、ほとんどの教科書は最後の年表に1行、「阪神・淡路大震災」と載っているだけです。

震災写真 [調べ学習] プロジェクト

そんな中で、生徒や学生たちがどんどん震災のことを忘れていっている、あるいは遠い存在と思っているのかなというところで、この本の出版社が、震災15年で続編を作ろうと提案してくれまして、若い人たちと防災ワークブックみたいなもの



を作ろうということになりました。

そして、その中の一つのコーナーとして、阪神・淡路大震災の「震災写真 [調べ学習] プロジェクト」というものをすることにしました。なぜかといいますと、この本の中には新聞社や遺族などから提供していただいた写真が幾つか入れているのですが、その写真にもいろいろな事実が埋め込まれているのではないかとということが、初版を作ったときに大変気になっていたからです。

それらの写真を調べることで、もう一度あの日に何が起きたのかを一緒にたどってみようということで、この震災写真プロジェクトがスタートしました。2009年の春です。

このブックレットのホームページにはいろいろな先生からの投稿がありましたので、投稿して下さった先生方を中心に、一緒にプロジェクトをやりませんかということで動き始めたところ、幾つかの高校、中学、大学から声が上がって、では一緒にやろうということになりました。

当初、京都、兵庫、静岡、神奈川から中高生・大学生、6校1団体、55人が手を挙げて、それぞれの学校でキックオフミーティングを行いました。中学生や高校生、大学生たちが集まって、この本の中に出ているいろいろな写真を見て、どんなことに疑問を感じたのか、何に納得がいかないのか

ということをみんなでディスカッションしました。

私は震災のときにいろいろ動き回っていましたので、写真を見ると「ああ、これはあの場面だろう」ということは全部分かっているつもりだったのですけれども、生徒や学生は一枚一枚に何か引っ掛かるというのです。「何でこのときあなたたちは、ぼーっとして炎が出たままで火も消さなかったのか」「何でこの電車の線路はゆがんだままで何日も放置されているのか。こういうことはあり得ないだろう」と。あるいは、いっぱい伝達のメモが張られましたけれども、「何であのメモなのだ。携帯メールとかいっぱいあるじゃないか。何であなたたちはそういうことをしなかったのだ。それには何か理由があったのか」と、そういうことに彼らはいちいち引っ掛かるわけです。

そういう知りたいことや納得いかないことを洗い出して、どれか写真を選んで探してみよう。現場に行って、写っている人に話を聞いてみようということにしました。

私は取材の手伝いはしない。そして、メディアは同行しないことを原則にしました。とにかく彼らだけが現場に行って、被災した人たちに会ってみる。それを調べるだけではなくて、パネル展示やネットで発表するというを前提にして、あらかじめリサーチするときにはそういったこともお断りして話を聞くということになりました。

そうして20枚ほどを選んで、最終的には16枚が発表できました。そのためにかかるお金は、企画をした出版社が持とうということになりましたが、みんなで「さあ始めよう」というところで出版社が自己破産して、資金は全部自腹でということとでスタートしました。

ここから写真を見ていきます。とにかく最初にあるのは写真と写真の説明だけです。

「激しく燃える民家と乗用車を押す人たち」



写真解説にはこう書いてあります。「激しく燃える民家と乗用車を押す人たち＝神戸市東灘区」。震災直後に出たグラフ雑誌のキャプションです。非常にシンプルです。そして「1995年1月17日午前7時30分」。よく見ていただきたいと思います。実はこれは、この年の関西の写真記者協会の1等賞を取った写真です。つまり、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン、いっぱいあったあの年の、関西の中で一番優れた写真に選ばれたものです。この写真を見て、皆さんはどう思われますか。

(会場) 車が燃えないようにみんな懸命ですね。エンジンがかからなかったのでしょうか。

(住田) 確かにそうですね、エンジンがかかったら一発ですね。

(会場) フロントガラスが割れていて、エンジンがかからないのかどうかはよく分かりません。それから、奥にもまた車があって、燃えかかっていますね。

(住田) 今、かなり高校生たちと同じようなところを指摘されました。すごくみずみずしい指摘です。この写真を見てどう思われますか。ぱっと

見の印象。

(会場) 私もメディアの人間なのですが。

(住田) いいです、メディアの人もいろいろな人がいますので。

(会場) これまでの方は、こういうものが写っているという感想をおっしゃったのですけれども、なぜこれが1等賞だったのかなということを考えました。例えば高速道路が倒れたり、いろいろな写真がある中でなぜなのかと考えながら見ると、この写真にはものすごい緊迫感がとらえられていると思うのです。火に追われるというか、燃えている建物の炎の赤さとか、必死に車を押す人たちの動き、そのあたりのほかの写真にはないものがこの写真にはあるのかなという印象を受けました。

(住田) 私も最初の印象は全く同感でした。で



すから、私の本の裏扉に持ってきたのです。何とも言えないこの構図。脱出し

ようとしている彼らの動き。その後ろではもう本当に炎が立ち上がっていて、大変緊迫感があり、非常に動きのある写真です。私はまさにその部分を感じました。

ところが、高校生たちは何を言ったかというところ、先ほどの男性とかなり近い意見です。「アパートが倒れてみんな大変なのに、持ち出すものはほかにいっぱいあるやろくに、何で自動車やねん」と。この人たちはなぜ車を守ろうとしたのか。実はそこからこの写真調べ学習はスタートしました。

写真を撮ったのは、共同通信の酒井充カメラマ

ンだということが分かりました。彼は東京にいます。調べた高校生たちは京都の高校生でした。電話で酒井さんと結びながらいろいろ聞いていたのですが、まずどこかが分からない。

酒井さんは当時は大阪支社勤務で、東灘区御影本町に住んでいた。彼はカメラマンですから、さあ本社に行くのか、現場に行くのかと悩みます。

「近隣でもう火がぼつぼつと上がっていた。煙が一番大きいところを目指して歩いた。それがこの現場だ」とおっしゃったのです。「時刻は午前7時から8時の間だった」。高校生たちは「どこやったんですか」「うーん、東灘区」。

彼らには、事前にヒントを出しておきました。離れた場所にいるので地図を指し示しながら電話をしなさいと。彼らはグーグルマップを思い付きまして、酒井カメラマンにパソコンの前に座ってもらい、同じグーグルマップをたどりながら、御影のちょっと西の、石屋川駅のこの辺ということで、現場は理性院というお寺であったことが分かりました。

その住職さんは当時から変わらない住職さんで、その当時のことを覚えていらっしやって、今はちょっと立派な山門ができましたけれども、山門の右側の奥、回り込んだところが写真に写っている境内で、境内の駐車場に近所の人が車を置いていたと。住職さんがおっしゃるには、「このあたりには倒壊したアパートが幾つかあって、そこに火が移ったのだ。写真の右側に写っているアパートは朝日荘というアパートで、この左側はお寺の境内である」と。彼はもう自分のお寺が燃えている写真は見たくないと言いながら、生徒たちにいろいろ説明してくれました。

そして、この車を押している人はOさんという女性で、当時、結婚を予定していたけれども、震災で式ができなかったということが大変記憶に残っている。住職さんは車を境内に止めていたのは近所の人なので、誰の車かはお存じでした。生徒たちは、何としてもこのOさんに話を聞きたいということだったのですが、その後、震災で朝日荘はつぶれるし、もうみんなちりぢりばらばらになって、Oさんもどこへ行ったか分からないと住職さんはおっしゃいました。

生徒たちはいろいろ手を尽くしました。お店ならば近所の人動きが分かるのではないだろうかということで、震災前から営業している近隣のお店を回りましたがそれも駄目で、そして朝日荘の後に建ったアパートの所有者に連絡を取ったり、あるいは前の朝日荘の登記簿まで彼らは調べて、何とかたどろうとしたのですけれども、手掛かりは得られませんでした。

そうこうするうちに、お寺の住職の奥さんが、OさんはTさんという方と結婚をして、尼崎に住んでいるらしいということを教えてくれました。彼女たち・彼ら、高校生たちは、さあ尼崎に行こうと言っても、どこに行けばいいのか分かりません。どうしようとなったところで、電話帳があるから、そこでTさんという名字、これは比較的多い名前なのですけれども、Tさんに一軒一軒かけたらどうかと、先生がアドバイスします。皆さんは笑われますけれども、生徒たちは必死です。尼崎のTさんまで分かったのだから何とかたどり着きたいということで、Tさんに申し訳ないけれども、一軒一軒に「もしかして以前こちらにいたOさんはいませんか」。あるいは、「そのご関係の方で

はいませんか」と電話をしていきました。そうこうするうちに、同じ名字のご親せきにヒットしました。そして彼らは今のTさん、旧姓Oさんと連絡を取ることができました。

Tさんは一緒に近隣を歩いてくださって、生徒たちに「あのときこうだったんよ」ということをいろいろ教えてくれました。あの日は結婚間近で、結婚の準備のために、今のご主人が朝日荘と一緒に泊まっていたのです。揺れで目が覚めたものの、周りは真っ暗で、ご主人はがれきの下から何とか抜け出せた。ところがTさん本人は、がれきの下敷きで身動きが取れなかった。そのうち朝日荘の奥から火の手が上がった。これはまさに写真のあたりですね。だから、もしかすると酒井カメラマンがシャッターを切っているころは、まだ彼女はこのあたりにいたのかもしれませんが。このままでは焼け死ぬと思った主人は、火事場のばか力で、自分だけを引っ張り出そうとしていたのを、布団ごと引っ張ったらずぼっと抜けた。それで私は助かったんだと、Tさんは言っています。そして、火が回ってきたので、理性院の境内に止めていた車もあきらめて、着の身着のまま避難しました。ところが、しばらくして落ち着いたところで避難所から戻ってみると、車は知らない間に境内から阪神電車脇の道路まで運ばれていたのですと言うのです。

実はこの車は、ここが大事なのですが、フォード社のシエラ・サファイア・コスワースです。僕は運転しないので全然車は分からないのですが、シエラ・サファイア・コスワースというのは、貴重なラリーカーなのです。ですから、車のファンが見ると一発で分かったはずなのです。

では、押してくれた人は一体どんな人なのか。Tさんは実は1回だけ避難所で会っているです。なぜ分かったかという、この写真は共同通信が配信したもので、神戸新聞も京都新聞も翌朝載せました。ですから避難所で皆がこの写真を見て、Tさんも「あ、私の車だ」と。そして自分の車を押しているのが赤いヘルメットの男性だというのも写っていた。Tさんはその人と、避難所でニアミスしているのです。そして、その人と「その節はどうも」と、ちょっと声を交わした。ただ、そのまま、それきり彼とはもう会えなくなってしまうたそうです。

非常に大切な車でした。実はフロントガラスが割れているのはサイドブレーキを外すためだったのですけれども、横のガラスも割れているようです。彼女いわく、「フロントガラスは割らなくてよかったんちゃうか」と（笑）。実は彼女は後にこのクモの巣だらけのフロントガラスの車で実家の方に避難するのですけれども、すごく寒かったのを覚えていると。本当にちょっとした笑い話になってよかったです。だって、彼女はあわや亡くなる場所だったのですから。

私は本当にこれはすごくビビッドな写真だと思います。必死の形相があったのですが、なぜ彼ら・彼女たちがこの車を押しているのかという真実は、まだ彼女たちに当たれていないので分かりません。2カ月ほど前、彼らは阪神御影駅前で一生懸命町の人に聞き込みをしたのですが、まだこの人たちには出会っていません。状況証拠から言って、大変貴重な車だったということは、車ファンの人だったらこの車の価値が分かって、ほかのものはもう仕方ない、これを出すかという選択をしたのか

もしれません。そういう1枚です。調べたのは、つくば開成高校京都校の高校生でした。

私は、この写真はあの災害から逃れることの必死さが伝わってくる、すごくいい写真だと思ったのですが、その必死さの裏にはいろいろな状況があったということです。でも、高校生たちが最初に見抜いた「何で車やねん」というのは鋭いですね。そこから考える。つまり、この車は大切だと思った人だから押していたということです。しかし、お断りしておきますが、この写真が災害の恐ろしさや、そのときのみんなが必死で逃げる形相をとらえた1枚であることは間違いありません。

「焚き火で勉強。食事を温める間も本を離さない受験生」



次は中高生たちの中で一番関心の高かった写真です。これもじっくり見てください。キャプションには「焚き火で勉強。食事を温める間も本を離さない受験生＝神戸市東灘区。1月24日」とあります。

中高生たちはこう言いました。「こんな大きな災害やのに、そんな中で避難までしてるのに、勉強するなんてびっくり」。私たちは日ごろ、大きな試験などがあるのはしんどいし、天変地異でも起き

て仕事や勉強がなくなったらいいのになと、ちょっとよくない心ですけど思ってしまうことがあります。ところが、あのとき中高生だった皆さんは、そんな中でも受験勉強をしていたのです。どんな気持ちで勉強していたのだろう。そしてこの人は受験に成功したのだろうか。中高生にとっては大変強い動機です。これは調べなければいけません。

写真を撮ったのは、読売新聞大阪本社の吉川英治カメラマンでした。吉川カメラマンに、彼らは話を聞きました。「地震発生からおよそ1週間たった1月23日、24日ぐらいになって、取材の余裕が少し出てきたら、避難所に暮らしている人たちが目に入ってきた」。折しもセンター試験と、その後の二次試験との間でした。吉川カメラマンは、今は受験生が大変だ、これはテーマになると思い、撮影に出かけたそうです。この写真を撮った場所も非常に重要なヒントだと思います。「この写真は東灘小学校で撮った。写真に写っている方々は家族で、この女性は大学受験のさなかであった」ということを教えてくれました。

吉川カメラマンはこういうふうには彼らに言いません。「子どもが悲しみに耐えている姿を見ていると、とても苦しかった」。そう言いながら、吉川カメラマンは少し涙ぐんでいました。相対で話をしていた高校生たちは、吉川カメラマンがちょっと涙ぐんだのが分かった。つまり、カメラマンもいろいろな思いで取材をしているのだということが分かったわけです。

この人に会いたい。この人が合格したのか。それは彼らの単純な動機ではあるのですが、調べていくうちに、この町がどうだったのかということ

を彼らは知ることになります。東灘区、東灘小学校の近辺をずっと回りました。「この写真に写っている人に見覚えはありませんか」。多くの人は忙しいとか、なぜそんなことをやっているのかと取り合ってくれなかったのですが、古くから卓球センターをやっている藤瀬さんという方が「あ、この人知ってるよ。折口さんという一家ではないか」と。高校生たちはその足で折口さん一家を訪ねたのですが、留守でした。彼らは京都の高校生ですので、藤瀬さんに取り次いでいただいて、手紙とファクスでご家族に「私たちはこんな趣旨で震災のことを調べています。皆さんがこの日、どんな状況だったか知りたいのです」とお願いしたところ、今は結婚して川崎市に住んでいる小笠原智恵美さんに電話でお話を聞くことができました。写真に写っているのは彼らと同じ年代の女性だったのだけれど、今、智恵美さん32歳になっています。当時は17歳の高校3年生、大学受験の真っただ中であつたということです。



インタビューは、つくば開成高校京都校と横浜緑ヶ丘高校が協力して取材しました。事前に送ってあつた写真を見ながら、「教科書を開いている人は智恵美さんに間違いないですか」と聞くと、「はい、そうです。後ろにいるのは家族です」。「写真を撮られたことは知っていましたか」「はい。兄と

小学校で焚き火に当たって体を温めていて、ちょうどそのときに読売の人が来ていました」「これは何の本を読んでいたのですか」「あまり覚えていないのですけれど、文系やったんで、国語か英語の参考書やったんと違うかな」と彼女は言います。

そして大学受験。「合否はどうでしたか。どこの大学を受けたのですか」「武庫川女子大学でした。合格しました」という話を聞いて、高校生たちはほっとしました。「ああ、合格したんだ。良かった。終わり」ではちょっと話にならないので、彼女たちは「そのときどんな状況だったのですか。どんな中で受験勉強していたのですか」と質問を続けました。智恵美さんは、「寒かった。でも、体が興奮していて寒いかとも思わなかったし、現実が把握できないまま、気持ちが追い付かない。だからつらいとかしんどいとかと思う余裕はなかった」「両親が家具の下敷きになっていたんですよ。大声で叫んだらうめき声が聞こえた。近所の人にお願ひして、両親を救出してもらいました。隣の方も亡くなっていますし、私が住んでいた家も全壊しました。幸い火事は出ませんでした、がれきの山でした」。

もう一つ、彼らはこんな質問をしました。「地震の起きた前の日は何をしていましたか」。すると、「前の日は3連休最後の日で、家族3人で阪急デパートに大学に行くための服とかを買いに行っ、本当に普通の休日を過ごしていました。普通にご飯も食べて、普通にお風呂にも入って、普通に就寝しました。本当に普通の1日でした。普通の日からこうなってしまった」と。

私は、震災のことは分かったつもりでしたが、彼らの記録用紙の最後にあった「前の日を

何をしていましたか」「前の日は本当に普通の日だった。普通に暮らして普通に寝た」というところを見て、ああ、そうだったな、あの日の前日、そんなことが起きるとは私自身も思ってもいなかったなど、思いを新たにしました。

「震災後初登校する女子高生たち」



次の写真です。これは「震災後初登校する女子高生たち＝神戸市長田区若松町。(1995年2月1日)」。毎日新聞社の写真でした。

私が何を思ったかから先に言います。私は最初にこの写真を見たときに、2月1日。そういえば1月31日とか2月1日は、初登校の日が多かったなと思いました。避難所にいろいろな学校の張り紙が掲示されていました。1月31日学校に集まれ。集まれる子だけでいいから、安否を教えてくださいという張り紙が、ずらっとありました。やっと友達に会える。それでちょっと明るい雰囲気というか、ちょっとほっとしたというか、そういうときだったのかなとも、私はこの写真を見て思いました。

ところが、これを調べた神戸大学の発達科学部の学生チームは、「背景の町は焼け落ちている。そこを歩く女子生徒たちは、なぜほほえんでいるのか。家や学校に被害はなかったのか。がれきが広

がる中、どうして、どのようにして授業が再開されたのか」と。発達科学という教育学部系の学生で、先生になる人がいたのでそのあたりが気になった。なぜほほえんでいるのか。

撮影をしたのは、「サンデー毎日」の高橋勝視カメラマンです。写っているのは神戸野田高校の生徒だったと彼は教えてくれました。「新聞やテレビなど、速報性のあるメディアと雑誌では役割や機能が違う。この先どう立ち直っていくのか。普通の生活への第一歩という点をテーマとして写真を撮影していた。高速道路や鉄道など、公のものは比較的早く立ち直っていくが、一方で個人の生活の立ち直りには差があると思った。焼け跡が残っている中、制服を着た生徒が登校している様子はニュースになると思った」。私もほぼ高橋カメラマンと同じ気持ちでこれを見たのです。学校が再開される。そのために彼女たちは学校へ向かう。久しぶりの学校、級友と会える。

しかし、神戸大の学生たちはこうも言います。「みんな焼け落ちているのに、彼女たちはなぜ制服を持ってるんや」と。彼らは現場を訪ねました。今はもうすっかり新しい町になっています。神戸野田高校にも彼らは訪ねます。ここで重要な情報、手掛かりが得られました。池田理事長は「確かにこれは当時の制服だ。右端に写っている女子生徒は、震災当時、須磨区に住んでいた生徒である」と。実はある先生のお嬢さんだったそうで、覚えておられたのです。

彼女とは比較的スムーズに連絡が取れました。写真右端に写っていたのは高木絵里さん、現在は根木さんでした。やはり調べた大学生たちとほぼ同年代だった彼女は、今 31 歳です。

「表情は、何か安堵しているように見えますが」と大学生たちは聞きました。すると彼女は、「住んでいたところはそんなに被害がひどいわけではなかったのです」。彼女たちは、須磨区の比較的被害の少ないところに住んでいた。「しかも、幼なじみで 3 人とも大きな被害は受けなかった。家も焼けなかったので制服はあった。気心の知れた仲の 3 人が歩いていた」。



ところが彼女たちは、この写真が写された場所からおおよそ 300 メートル先にある神戸野田高校で、こういう体験をします。教室に先生が入ってきて急に泣き出した。そして、実はクラスメートが 1 人亡くなったということを先生から聞かされます。つまり、この写真の狙いはその通りだったのです。今日から学校だと、希望に満ちて登校した。恐らくこの何かカットかの中からはちょっとほほえんだ写真をチョイスしたのだと思います。しかし、ここからわずか数百メートル先の学校へ行って、クラスメートが亡くなったということを知らされる。

「学校が通常どおりになったのはいつごろでしたか」という質問をすると、「やはりとにかく空気が重く、ましてやクラスメートが亡くなったので。亡くなった子が亡くなる前の晩に書いた手紙が家から出てきたらしくて、それをみんなで回し読みをしました」と。

調べたのは神戸大学の男子学生のチームです。

最初、いろいろな女子校に電話をかけて、すごく不審がられました。それで同僚チームの女子学生に電話をさせた方がスムーズに話がいくなということ、彼らは学びます。初めての人はそうですよ。いきなり電話をかけてきて、震災のときにどうだったなどと聞かれると、「何なの、あなたたち」となりますね。

「遺体を前に遺族は泣き崩れ、手をあわせる」



さあ、これが今日ご覧いただく最後の写真です。

「遺体を前に遺族は泣き崩れ、手をあわせる＝東灘区魚崎北町で（1995年1月20日）」。読売新聞社。

私はこの写真が一番難しいと感じていました。ご遺族が本当に生徒・学生たちのフィールドワークに応じてくださるかどうか、大変心配しました。読売新聞社も心配していました。これは「神戸大学ニュースネット」と「大阪大POST」という二つの大学新聞のチームが取材をしました。どのようないきさつでこの写真は撮られたのだろうか。

新聞社のカメラマンは、現在、東京本社写真部にいる秋山哲也さん。僕と同い年です。当時は35～36歳で、ばりばりに働いていたカメラマンです。秋山さんに聞きました。「『母がまだ埋まっていま

す。救助隊を探していただけますか』と、1月20日のこの取材中に女性から声を掛けられた。生存者がいそうな現場があると、救助隊を探してきた。救出はされたのですが、残念ながら高齢のお母さんは既に亡くなっていた。写真を撮るときは心を鬼にして撮った。紙面に使えないかもしれないけれども、こういう写真を残しておくことも必要だと思った」。秋山さんが人垣の間からシャッターを切ると近所の人から怒鳴られて、すぐに撮影をやめたと言います。

学生たちは魚崎北町をうろろしながら、いろいろな人に尋ねました。何人かに伺ううちに、偶然にも「このご家族を知ってるよ。石原さんのご家族と違うかな」という情報を得ました。後日、こんな趣旨でということを丁寧に説明してお願いすると、「お話ししてあげましょう。いらっしゃい」ということで、石原さんのお宅を訪ねてご家族とお話することができました。

石原さんのお家の当時の写真が残っています。ご自宅は1階部分は築70～80年ぐらいで、後で2階部分を建て増しました。2階部分が1階の上に乗ったような形で崩れたのではないかとおっしゃっていました。1階の玄関に入ってすぐの場所で寝ていた、当時93歳のまちさんが亡くなりました。お孫さんが崩れたがれきの中に手を入れると、偶然まちさんの手を探り当てた。握ると握り返してくれた。最初は生きていたのです。ところが、どうしても助け出すことができませんでした。その後、自衛隊に生存の確認をしてもらったのですが、残念ながら既にそのときは亡くなっているということで、後日必ず来ますと言われ、3日後に遺体の搬出が行われた。

右端は保生さんというお父さん、つまり、亡くなったまちさんの息子さんです。保生さんは「運ぶところがなくて、しばらく歩道にしばらく置くしかなかったんや。かわいそうに」とおっしゃっていました。

後日、避難所で知人からグラフ雑誌に写真が出ていることを知らされた石原さん一家。現場ではだれも撮影されたことには気付かなかったそうです。

学生たちが一番気になることを聞きました。

「写真に撮られてどう思われましたか」「グラフ雑誌に掲載されてどう思われましたか」。保生さん、お父さんが言います。「われわれとしては写してほしくないけれども、しかしそれも一つの報道の在り方としては、まあ容認できると思いますけどね」。もう1人、お孫さんの美雪さんは、「どういう状況やったかは見てみないと分からない。言葉だけでは伝わらない部分があるから」と言葉を継いでくださいました。

お話を聞いた後、同じ場所に立って写真を撮らせてくださいました。



予想していない結果も

このように、私たちが予想もしていなかった結果が次々に出てきました。それで一つ感じたのは、写真という記録の価値です。その場で撮っておかなければ、残しておかなければ、どんどんなかつ

たことに近づいていってしまうような気がしました。もちろん言葉で、書き物でというのがありますが、映像の記録で残るといふことの大切さというものを非常に感じました。

撮影者の葛藤もありました。撮影者も悩みながらシャッターを切ったり、スタートボタンを押したりしていました。そして、撮影者の知らないその後をたどることができました。

昔の話で、若者からは非常に遠い事象なのだと私は思っていたのですけれども、遠ければ遠いほど、うまく引き出せば、知りたいとか、なぜだろうとか、そんなはずはないだろうという気持ちが高まって、動機も強まる。あと、生徒や学生のコミュニケーションの力がぐんと増したと、指導した先生は言っていました。あまり手紙も書いたこともないし、初めての人に電話をかけるなどという経験も今までなかった子たちが、知りたいという気持ちに押されて、頑張って電話をかけたり手紙を書いたりしました。

それから、お答えくださった皆さんの中には、メディアの取材には今まで応じてこなかったけれども、高校生だったら、学生だったら教えてあげようということで答えてくれた人もいました。被災した人たちに、若い人に託すという気持ちがあったということも事実です。

そのほか、今まで一般には知られてこなかったことも結構彼らは取材してきました。あの日何が起きたのか。駅舎が崩れて、阪急三宮駅前で亡くなった人がいたとか、市役所のエレベーターに閉じ込められた人がいるとか、ほかのことに目を取られて僕たちが知らなかったこと、もっともっと知っていてもよかったなと思うことを、彼らはい

ろいろキャッチしてきました。

中には失敗したものもありました。人にたどり着けず、一般論だけでまとめようとしたものは、うまくいきませんでした。やはり人に会って、人に話を聞いて、人にたどり着いて、というものに、非常に大きな成果がありました。

大切なこと、注意すべきこと

大切だったのは、取材のルールとツールです。やはり事前にちゃんと下調べをして行こうということです。一から現場で話を聞いたのでは、相手も大変負担になります。

もう一つ大切だったのは、地図です。地図の中でも住宅地図。15年前のゼンリンの住宅地図を持っている図書館がありまして、これが大変役に立ちました。それから電話帳です。ネット検索でダイレクトに引っ張ってこようと思ってもなかなか出てこないのですけれども、地図や電話帳などで基本的なことを調べたうえで、いろいろなネットの機能を使うということが効果的でした。

もう一つ彼らが経験したのは、取材のルールです。「どこからその情報を聞いて来たんや」「誰から聞いたんや」と、結構怒られたのです。教えてくれた人の中には「私からこの話を聞いたということは言わないでほしい」と言う人もいて、その場合には必ず情報を提供してくれた人の立場を守るようにということを彼らは最初に言い渡されていました。彼らは「町を歩いていてある人から聞いた」というふうにしかなりませんが、相手は最終的には応じてくださいました。それから、最初から結果を公表する可能性があるかと断りを入れてから取材をしました。

中高生を指導する教諭の覚悟も非常に大切でした。最初は「何でおれに聞いてくるんだ」とか「そのやり方は失礼じゃないか」とか、トラブルも何件かありましたし、どう調べればよいのか行き詰まってしまったときの解決方法、最後はお手紙を書いて誠意を尽くそうとかといった指導教諭の役割も、大変大切でした。

ただ、一方でこの写真が報道目的以外で使われる可能性があるということにはかなり危うさを含んでいたのですが、今回は学習、調査、研究ということで報道各社も認めてくれました。あと、調査、取材、ネット公開などのルールや倫理を知って、それをきちっと守らせる必要がありました。仮の名前でなければ駄目という人の実名をうっかりネットに載せてしまっただけではいけないので、そういったところには随分注意しました。

プロジェクトについては、公式サイトがあります (<http://home.kobe-u.com/sinsai/>)。ぜひご覧ください。また、パネル展をこれまでに兵庫、神奈川、東京など10カ所で開いてきましたが、彼らは今後も引き続きパネル展での発表も行おうと考えています。また、出版の予定もあります。

1枚の写真から見えてくること



1枚の写真を見て、なぜこのようなことになったのか知りたいという動機を

持つことが、非常に大切でした。それから、調べ直すということで、震災を体験した人も、あるいはカメラで取材した人も知らないその瞬間の背景

や写した直後の出来事、その後の事実あるいは15年間の道のりといったものを知ることができたのは、大きな成果でした。15年というのは非常に中途半端だと思う人もいたと思いますが、一世代30年たらず、15年というある意味中途半端な年代であるからこそ、たどることができた部分も数々ありました。

というわけで、最後に1分だけDVDを見ます。実はこれは私たちNHK大阪放送局のアナウンサーのグループの中で、当時大学生だった30歳代半ばのメンバーが制作した1分間のミニ番組です。

DVD「リエゾン被災人～1枚の写真から」

実は若い取材者にどのように私たちの体験を継いでいくかということも、放送の現場で今大切なテーマになっています。この取り組みは中堅・若手アナが独自に進めているのですが、1枚の写真をもとに若いアナウンサーが震災を取材する手法です。

アナウンサーは、緊急初動の現場では、画面を見て言えることを描写する訓練をしろと言われていました。阪神・淡路大震災の動画の方も点検してみると、やはりいろいろなことがありました。実は比較的早い時間帯に、兵庫区の映像で「ばあちゃん」と崩れた家に向かって叫ぶ中学生が写っているのです。実はそれは生き埋めを伝える最初の映像だったのですが、残念ながら最初にオンエアされたときアナウンサーがほかのことをしゃべっていて、その声が消えていたのです。

オンエア中に入ってくる動画や写真から何を読み取るのかということは私たちアナウンサーの大切な仕事でもありまして、今回、私は中高生・大

学生から、基本的なことをもう一度、一から突き付けられたなという気がしています。

つたない話でしたけれども、最後まで聞いていただいていたありがとうございます。

(まとめ 日本災害情報学会事務局)

